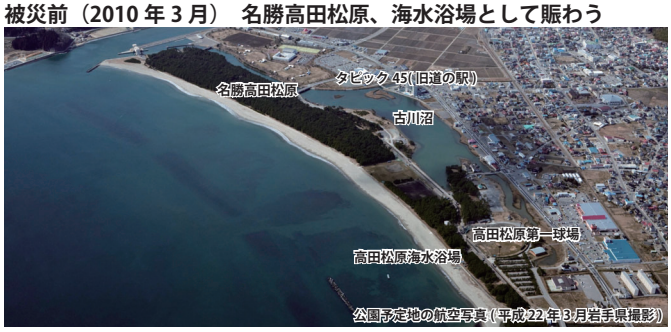
高田松原津波復興祈念公園の概要

東日本大震災が甚大な被害を生じた未曾有の大災害であったことに鑑み、国、岩手県、陸前高田市が連携して、復興の象徴となる高田松原津波復興祈念公園を整備することとなった。
本公園は、国が整備する国営追悼・祈念施設を中核に、名勝高田松原や古川沼の水辺等の郷土の自然と風景の再生、広域からの主要アクセスにおけるゲート性の確保等を図るとともに、かさ上げ市街地と連携した円滑な避難誘導、広域的な緑の連続性の確保等、公園外ともシームレスにつながる、復興のまちづくりと一体となった空間を目指したものである。

なお、国営追悼・祈念施設については、閣議決定された、①東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、②震災の記憶と教訓の後世への伝承、③国内外に向けた復興に対する強い意志の発信の３つを目的としており、津波が来襲した広田湾から津波が遡上した気仙川へと至る「祈りの軸」を中心に追悼・鎮魂に特化した非日常空間を形成している。

被災前（2010 年 3 月）　名勝高田松原、海水浴場として賑わう

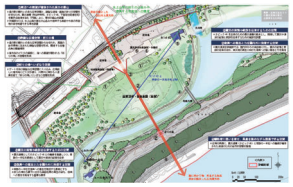


被災直後（2011 年 3 月）　約 2 千人もの犠牲者が生じた県内最大の被災地となる

我々のこの地での取組は、震災直後の市の復興事業から始まり、本公園の基本計画、基本・実施設計、国営追悼・祈念施設の基本・実施設計を行ってきている。
本作品は、公園全体約 130ha のうち、国営追悼・祈念施設（約 10ha）と、2021 年 7 月に一部開園された震災遺構タピック 45 周辺、古川沼東側等の約 32ha のエリアである。

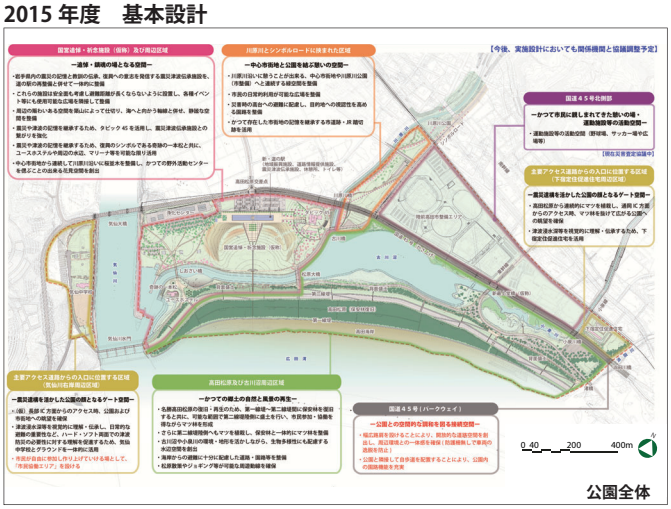
2014 年度　基本計画

公園全体



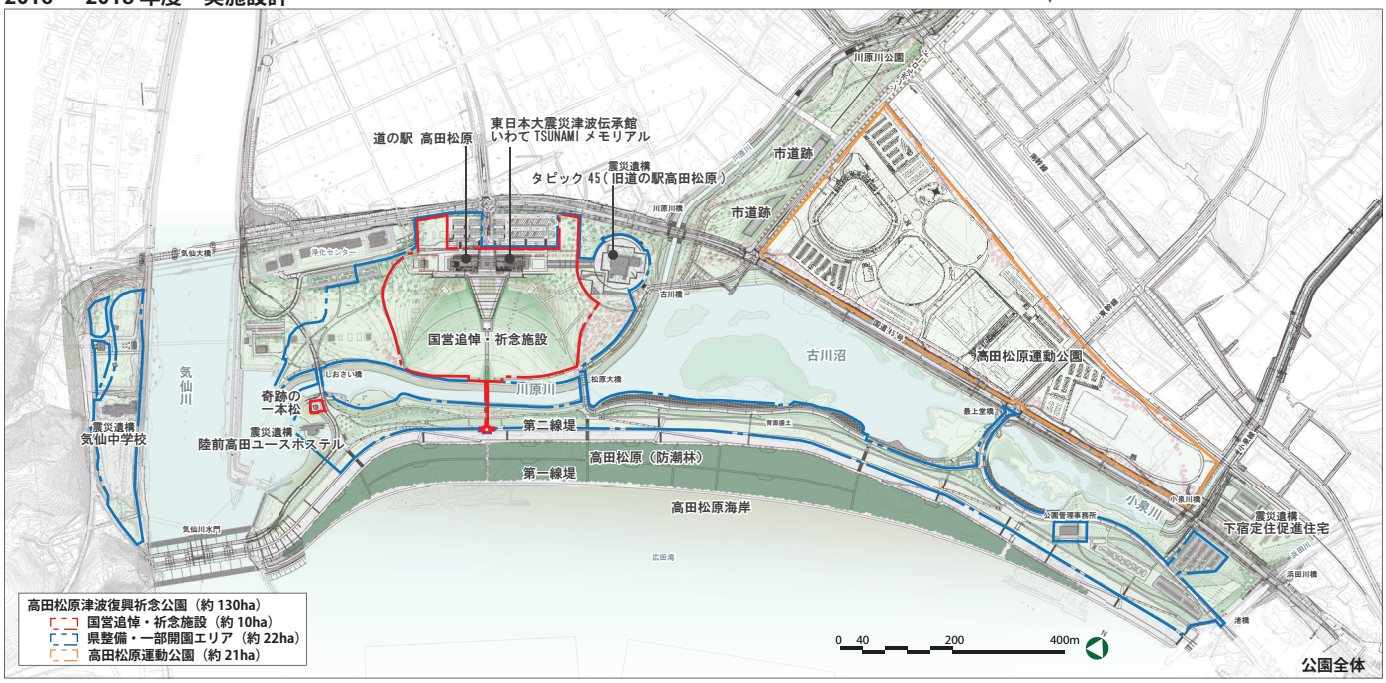
国営追悼・祈念施設及び周辺区域

2015 年度　基本設計



公園全体

2016 ～ 2018 年度　実施設計

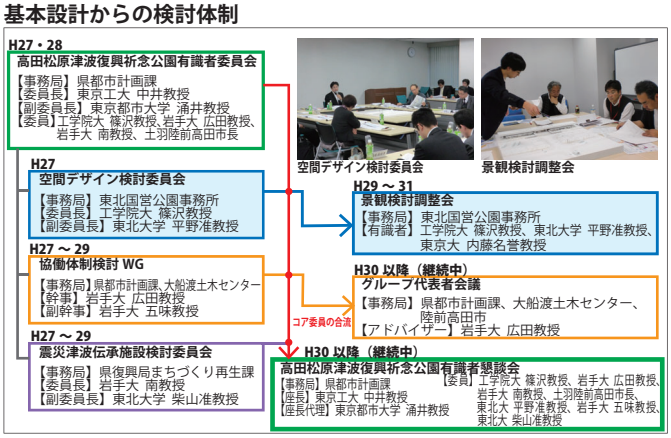


高田松原津波復興祈念公園の検討経緯・体制

県では、震災直後からこの地に国営メモリアル公園を誘致すべく、2011 年 8 月に県の復興計画に位置付けられ、市の復興計画においても防災メモリアル公園の形成が位置付けられ、2012 年度には国営防災メモリアル公園を誘致する会が発足、3 万通を超える署名簿を関係省庁に提出する等の活動が行われた。
このような状況を受け、県により高田松原地区震災復興祈念公園構想会議が設置され、公園の理念や役割についての提言がなされ、2011 年には国により震災復興祈念公園基本構想検討会が設置され、震災復興祈念公園及びこれに対する国の役割が検討された。
その後、2013 年度から本公園の基本構想の検討が始まり、有識者委員会（委員長：中井検裕　東京工業大学大学院教授）が設置され、これまで検討が進められた。2018 年移行は有識者懇談会として本公園の整備状況や今後取り組むべき課題等、現在も議論の場として継続している。
本公園の設計においては、有識者委員会を上位とする様々な会議、WG 等を行いながら検討を進めてきた。
基本設計では、空間デザイン検討委員会（委員長：篠沢健太　工学院大学教授、副委員長：平野勝也　東北大学准教授）において空間デザイン・施設デザインの検討を進め、実施設計では、景観検討調整会として、基本計画時当時の内藤廣委員をアドバイザーに迎え、細部に至る議論を重ね、造園、土木、建築の垣根を越えた一体的な設計検討を行った。

また、協働体制検討 WG（幹事：広田純一　岩手大学農学部教授）や市民 WS 等により、地域性に合った組織づくりを進め、2017 年からは協働による管理運営のためのグループ代表者会議を継続して開催し、段階的な組織化に向けた取組を行っている。
震災津波伝承施設検討委員会では、道の駅高田松原と併設され、震災の記憶と教訓の伝承を担う東日本大震災津波伝承館の展示検討を行った。併せて、景観検討調整会においては、伝承館を拠点に公園内の震災遺構と連携したフィールドミュージアムとして、解説サインや震災遺構を活用した伝承活動等、ハード・ソフト両面につながる検討を行った。

基本設計からの検討体制

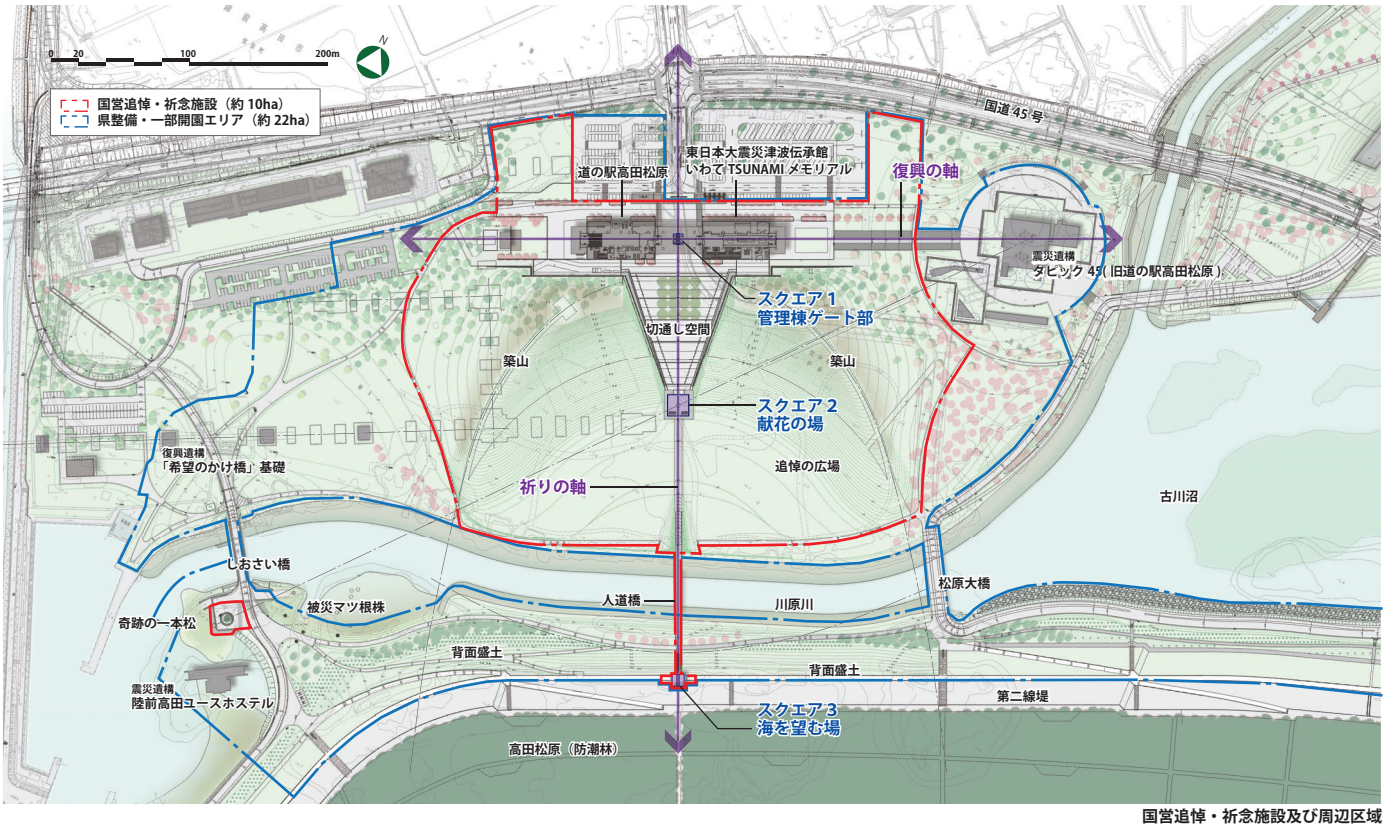


高田松原津波復興祈念公園の設計　① 国営追悼・祈念施設の祈りの場のデザイン

本公園の中核を成す国営追悼・祈念施設は、道の駅高田松原、東日本大震災津波伝承館等で構成する管理棟を結界に、津波が来襲した海への「祈りの軸」を中心とするシンメトリーな築山で包み込んだ凹状の造形により、非日常的な「祈り場」の空間を形成した。

「祈りの軸」上には、管理棟ゲート部から海に向かって、切通し空間、献花の場、人道橋、海を望む場で構成し、特に海岸防潮堤上に配置した「海を望む場」は、海への眺望や再生していく名勝高田松原、かさ上げ市街地や郷土の山々等を広く望むことができる場である。

国営追悼・祈念施設の施設構成



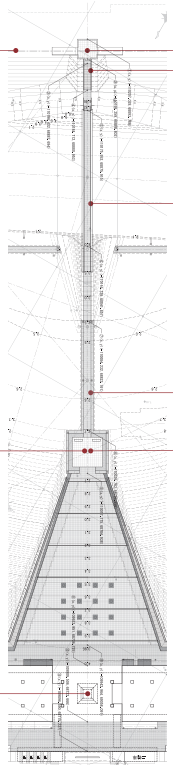
国営追悼・祈念施設及び周辺区域

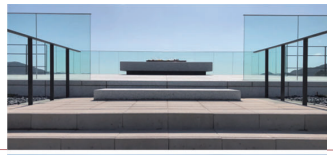
「祈りの軸」の象徴性を発揮するコンケイブ状の縦断形

「祈りの軸」は、追悼式が執り行われる切通し空間から慰霊碑的モニュメントとなり、海への祈りの方向性を示すため、軸線を強調するように絞り込んだ切通し空間から、園路、人道橋、海を望む場へと徐々に立ち上がるコンケイブ状の縦断形を形成し、海岸防潮堤で遮蔽された海の存在を示唆するとともに、追悼の広場の緩やかな凹地形と対比させることで、その象徴性を明快に表現した。

追悼と鎮魂の憶いを深化する３つのスクエア

「祈りの軸」では、神社における"鳥居・手水舎"、"拝殿"、"奥宮"のように、非日常空間の中で徐々に追悼と鎮魂の憶いを深化させる３つのスクエアを配置した。

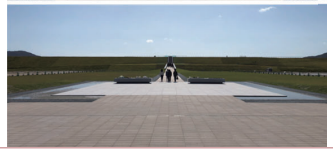



海を望む場

階段

人道橋

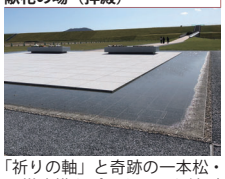
スロープ園路


献花の場

海を望む場（奥宮）

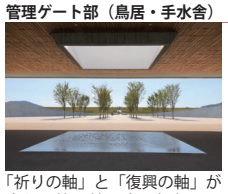
川原川を渡河して辿り着く「祈りの軸」上で唯一広田湾を一望できる、津波が押し寄せた海を厳粛な想いで対峙する場を形成した

献花の場（拝殿）



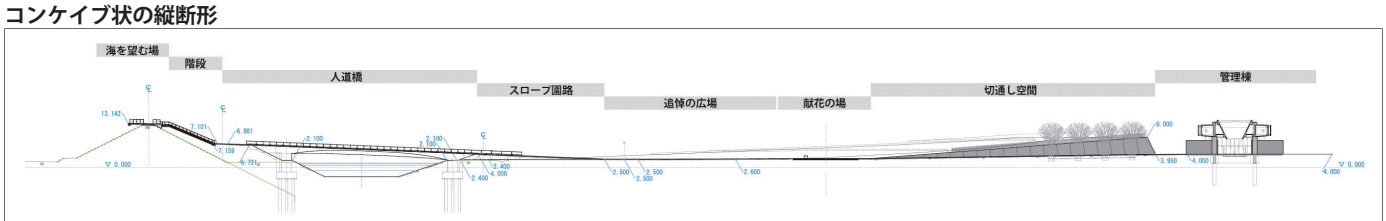
「祈りの軸」と奇跡の一本松・震災遺構タピック 45 を結ぶ軸との交点に、一筋の「祈りの軸」を見ながら花を手向ける場を形成した

管理ゲート部（鳥居・手水舎）



「祈りの軸」と「復興の軸」が交わる管理棟の大屋根部に開口を設け、自然光が水盤を照らす、未来に向け復興を感じる場を形成した

コンケイブ状の縦断形

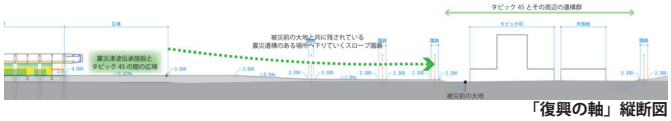


「祈りの軸」縦断図

高田松原津波復興祈念公園の設計　② 国営追悼・祈念施設と震災遺構タピック 45 をつなぐデザイン

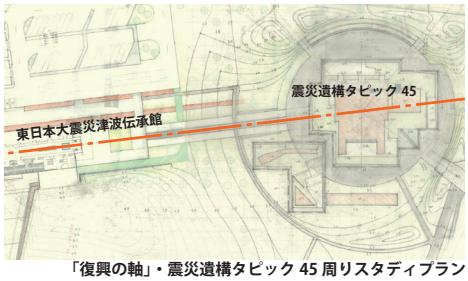
「祈りの軸」の起点に位置する管理棟では、ゲート的機能に加え、災害の脅威を伝える震災遺構タピック 45、その教訓と伝承のための東日本大震災津波伝承館、明日を生きる暮らしと共にある道の駅高田松原からなる「復興の軸」をコンセプトに据え、「祈りの軸」と「復興の軸」の２つを主軸に、管理棟内の諸室配置等を行うとともに、屋内外が一体となった象徴的なランドスケープを展開した。

震災遺構タピック 45 に向かう「復興の軸」上に園路を配置し、被災した地へ降りていく印象を与える縦断勾配としている。また、震災遺構と見学者のエリアを仕切る境界は、震災遺構や被災した地を切り取った、XY 方向のエッジの効いた形態とした。
また、震災遺構を見ることで被災当時を思い出したくないという市民感情に配慮し、市街地側にマウンドを設け、震災遺構を柔らかく遮蔽した。



「復興の軸」縦断図

管理棟のファサード

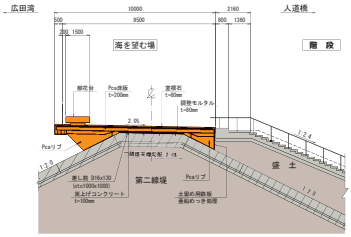


「復興の軸」・震災遺構タピック 45 周りスタディプラン

伝承側から望む

高田松原津波復興祈念公園の設計　③ 多様な関係者とのデザイン調整

「祈りの軸」を中心とした祈りの場の形成にあたっては、海岸や河川、保安林等の災害復旧事業と一体となった空間とするため、これら多数の関係者と密に連携・調整しながら検討を行った。
特に海岸防潮堤については、「祈りの軸」を受ける大きな地形を形成しつつも提体の許容沈下量内に収めるための背面盛土量の設定や、浮遊感を確保し上で津波時に提体の破損等を発生させない海を望む場の設置方法等、県海岸管理者と協議を重ねながら構造上の安全性とデザイン上の重要性を共有し、祈りの場にふさわしいデザインを実現した。



海を望む場の断面図

L1 及び L2 地震動への安定性を確保するとともに、L2 津波に対しては防潮堤躯体への影響を回避するため、防潮堤天端にのみアンカーでずれ止めを行い、張り出し部を複数のリブで支持する、防潮堤躯体へ固定しない構造とした。